

「旧丹後家住宅主屋」

中能登町教育委員会教育文化課

文化財保護係 坂下博晃

所在地 鹿島郡中能登町能登部上へ部12番地

所有者 中能登町

構造形式 木造2階建て、正面八間半、側面九間半、切妻造棧瓦葺き、妻入り、あずまだち型

建築年代 昭和8年、一部増築



能登の穀倉地帯である邑知地溝帯は、北の眉丈山系と南の石動山系に挟まれた帯状の平野である。両山麓には能登半島の内浦と外浦を結ぶ街道があり、街村が形成されている。主要は石動山系山麓を走る道で東往来と呼ばれており、藩政期には宿場町が形成された。それに対して眉丈山系山麓を走る道は西往来と呼ばれ奥能登へ向かう近道として、利用されてきた。

西往来の街並みは、「町家型」民家のほかに切妻の大きな三角妻壁を立ち上げた「あずまだち」という形態をとる「農家型」民家を主体とした建物が街道沿いに続くのが特徴である。江戸時代の文化・文政期以降の「徳丸縮」「能登縮」「能登上布」と称する織物産業が飛躍的に発展したことが当地に優れた建築物を生み出す大きな要因となった。

丹後家は、代々織物業を営み麻織物が主体であった、当地域において先進技術を導入し、絹織物の生産拡大に努めたほか、海外への販路拡大にも寄与し、財を成した。

旧丹後家主屋は、西往来沿いの大規模な「あずまだち」農家風住宅である。妻入り屋根の棧瓦葺で、2階建て、間口8間半、桁行9間半、延床面積438.12㎡である。前面は、塀と主屋に付属した庭へ至る門がある。農家風住宅ではあるが、外観は大戸と細微な加工が施された格子戸を設け町屋風住宅の要素をもつ。建築年代は、聞き取り調査により、昭和8年に建築されたことがわかっている。

間取りは、土間に面して茶の間をとり、広間裏に勝手と寝間を並べ、上手に座敷と仏間を加え、さらに裏側に部屋が一行加えられる。

茶の間は、意匠にこだわった空間であり、梁を井桁状に組み見せるなど、細部のこだわりがみられる。藩政期以降の伝統的技術受け継いだ昭和初期の中能登の民家の典型を残す価値の高い建物と評価できる。